

## 春芽アスパラガス 出荷最盛期



ＪＡ筑紫アスパラガス部会は３月１０日、ＪＡ資材配送センターで部会定例会を開きました。部会員や福岡普及指導センター、ＪＡ筑紫担当職員等１９名が参加。出荷規格や基準などについて部会員で意見交換や目合わせを行いました。

部会の春芽アスパラガス出荷は２月上旬から始まり、３月中旬には最盛期を迎える見込み。今年の生育は暑さの影響で例年よりも早く、おおむね順調です。

ＪＡの担当者は「出荷の最盛期に向けて管理を徹底し、高品質なアスパラガスを出荷しましょう」と呼びかけました。

部会は、高品質なアスパラガスを出荷するため、目合わせや圃場巡回を定期的に行っています。

## 消費者が農家を応援



ＪＡ筑紫は３月６～１３日までの８日間、新型コロナウイルス感染拡大防止による臨時休校対策の影響で、納入がキャンセルになった学校給食用の農産物を販売しました。

これは政府の休校要請を受け、管内の小中学校が休校になったことによる、生産者の所得低下を防ぐための救済措置。納入予定だったキャベツや大根、アスパラガスの生産者を支援するため、ＪＡ食農推進課が企画しＪＡ直売所全５店舗での店頭販売や、行政関係者等への注文販売のほか、ＪＡ職員も一丸となって支援しました。

農産物は、キャベツや大根、アスパラガスを通常の価格より安く販売。「生産者を応援したい」という思いが広がり、８日間でキャンセルになった数量の３倍以上を売り上げました。

那珂川市で学校給食向けの大根やキャベツを生産する上野康之さんは「一時はどうなるかと思ったが、皆さんにご協力していただき、大変ありがとうございます」と話しました。

## 筑紫神社「粥占祭」



筑紫神社で3月15日、かゆに生えたかびを見てその年の天候や農作物の豊凶などを占う「粥占祭（かゆうらまつり）」が行われました。かびの生え具合や色で占った結果、全般判断は「中」。また、天候面では雨が「少なし」、稲作の作柄は「中上」、麦作の作柄は「中」と出ました。

祭りは毎年行われる伝統行事で、200年以上の歴史があり、市の無形民俗文化財にも指定されています。

占いに使うかゆは、2月15日に行われた「粥納（かゆおさめ）」で神職が炊いたものです。表面を県の旧国名に当たる筑前、筑後、豊前、肥前の四つに分けて本殿の御内陣に1カ月間納めました。取り出したかゆの表面を判断委員が確認しました。

神社の味酒安志宮司は「今年も農作物の豊作をお祈りしたいです」と話しました。

## JA筑紫支店だよりコンテスト



JA筑紫はJA本店で3月18日、令和元年度支店だよりコンテストの表彰式を行いました。

1位の春日南支店（南風だより）、2位の御笠支店（宝満だより）、3位の山田支店（山友会だより）の上位3店舗を表彰しました。写真や手書きのイラストが多く、組合員の紹介など読者に親しみやすい紙面が高く評価されました。

JAは支店だよりを通じて、組合員や地域の方にJAをより身近に感じてもらい、地域に親しまれるJAを目指すことを目的に、支店だよりを全店舗で発行しています。平成25年から始まり、今年度で7年目を迎えた取り組み。

コンテストの審査は「季節感」「レイアウト」「地域の情報発信」「親しみやすさ」の4項目の審査結果と、JAのホームページに掲載している支店だよりの閲覧状況をもとに加点。また審査員は、JAの常勤役員や広報委員会委員、JA福岡中央会や印刷業者などの有識者が務めました。

審査員を務めたJAの白水組合長は「これからも支店だよりを通して、JA筑紫を地域の皆さまに知ってもらい、信頼されるような紙面づくりを心がけてほしいです」と話しました。

## 加工用生タケノコ出荷説明会



ＪＡ筑紫は３月１９日ＪＡ営農センターで令和２年加工用生タケノコ出荷説明会を開きました。竹林を所有する組合員２７名が参加。職員が集荷日程や集荷規格等、写真入りの資料を配付し説明しました。集荷は、３月３０日から４月３０日、及び５月７、８日まで続く予定です。昨年の集荷２７ｔを超える生タケノコの集荷を呼びかけています。

ＪＡは、中山間地の活性化や竹林整備、農業者の所得向上を目的に、毎年生タケノコの集荷を行っています。近年は国産タケノコの需要が高まっていることもあり、組合員が積極的に出荷をしています。

説明会では、ＪＡ営農生活部の小金丸部長が「タケノコを多く出荷していただき農業者の所得増大に繋げてほしいです」と話しました。

## 家畜への感謝と冥福祈る



ＪＡ筑紫は３月１９日、畜魂祭をＪＡ本店にある畜魂碑前で執り行いました。

ＪＡ肥育牛部会や養鶏農家、関連業者や行政関係者、ＪＡ役職員等３０名が参列しました。

筑紫野市阿志岐の圓徳寺の住職が読経し、白水組合長等が献花。家畜に感謝の気持ちを込めて供養しました。

## 種ショウガ出荷開始



ＪＡ筑紫生姜出荷組合は、筑紫野市の山口倉庫で、種ショウガ１１２０kgを種苗会社へ出荷しました。出荷組合員と種苗会社社員、ＪＡ農業振興課職員は、今年の種ショウガの出来具合などを確認し、熱心に意見交換しました。種ショウガは、種苗会社を通して全国に出荷されます。

生姜出荷組合は、４０年ほど前に６５名で発足しました、組合員数は減り、現在は６名。生産者の高齢化と後継者問題を抱えています。しかし、講習会や巡回、視察なども積極的に行い、品質管理の徹底に一丸となって取り組んでいます。

ＪＡ担当職員は、「今年は全体的に病気の発生が少なく、天候に恵まれました。今後も高品質なショウガを出荷してほしいです」と話しました。

## 無人ヘリ安全第一に



麦刈りシーズンを前に、3月25日からJA筑紫無人ヘリ防除作業部会による「イチバンボシ」「チクゴイズミ」の防除作業が始まりました。令和2年度麦防除作業の面積は約204ha。作業は、麦刈り前の4月下旬まで続きます。

部会は、部会員10名で無人ヘリ2台による米・麦・大豆防除活動に取り組んでいます。適期防除をするために圃場巡回を行い、作業効率が上がるような散布計画を立て、安全作業に取り組めます。

JAの担当職員は「基本を忠実に守り、安全第一で防除作業に努めたいです」と話しました。

## 年間来場者数100万人突破



JA筑紫は3月27～29日の3日間、JA管内5店舗の農産物直売所「ゆめ畑」で、初めて年間来場者数100万人達成した記念として、大感謝祭を開きました。

JA直売所ゆめ畑は、地産地消の推進や出荷者の利便性の向上、組合員の所得増大に繋げることを目的として運営しています。平成15年に那珂川店、平成17年に太宰府店、平成21年に大野城店と筑紫野店を出店。平成30年には春日店が出店し、JA管内5市それぞれに直売所を設ける「5店舗体制」が確立。出店当初から目標としていた年間来場者数100万人を、令和元年度に初めて達成しました。

27日には、JA直売所「ゆめ畑那珂川店」で記念式典を開催。全店舗合計100万人目となった那珂川市在住の吉田けい子さん（68）に松田敏雄専務が、JA筑紫米や地元農産物の詰合せを手渡しました。

吉田さんは「新鮮な農産物が揃っているため、1週間の半分以上は買い物に來ています。突然でびっくりしましたが、とても嬉しいです。今後も利用したいです」と話しました。

店頭では、新鮮な野菜や米、博多和牛などを特価販売。また、野菜の詰め放題など店舗ごとに違うイベントも行いました。

松田専務は「これからも消費者に安全で安心な農畜産物を知ってもらい、より多くの方に直売所を利用させていただきたいです」と話しました。